第4回 忘れられない看護エピソード
優秀賞
一般部門

赤ちゃんを天国に見送った日

【楠本（くすもと） 由香里（ゆかり）・東京都】

結婚して7年が過ぎ、流産を乗り越え、待ちに待った妊娠。安定期に入り、お腹をポンポンと蹴る赤ちゃんがいとおしくてたまらない日々が続いていました。明日から妊娠7カ月に入るというその日。まさかとは思いましたが、私の赤ちゃんがお腹の中で亡くなっていたのです。

一晩で何とか心の整理をつけ、入院。ほとんど眠れないまま夜が明け、翌朝、陣痛促進剤を打ち、出産。体重わずか528グラムの赤ちゃんでしたが、眉の生え方、小さな口など夫にそっくりの男の子。分娩後は、元気に生まれた赤ちゃんと同じようにカンガルーケアをさせていただき、夫と私と赤ちゃんの3人での時間をゆっくりと過ごさせていただきました。

そしてしばらくしてわが子に会うと、なんと助産師さんが手で縫ってくださったぴったりの産着を着ているのです。白い箱には10ccほどのミルク、折り紙で折ったやっこさんや鶴も入れてくださいました。それから、赤ちゃん誕生には恒例の足型スタンプ。4センチほどの小さな足でしたが、この足でポンポンとお腹を蹴ってくれたのだと思うと、涙が止まりませんでした。オギャーと泣かないこと、そしてママのおっぱいを飲まないこと以外は、元気に生まれた赤ちゃんと同じように病院での時間を過ごさせていただきました。

助産師さんが言ってくださった「天国の赤ちゃんはずっとママのそばにいるからね」という言葉に救われ、私はその子が生き続けていると信じることができました。そして今、再びお腹に赤ちゃんを授かり、来月には出産する予定です。あの日があったからこそ分かる命の重み。これからもずっと一生、天国にいる赤ちゃんのこと、病院で私を支えてくださったスタッフの皆さまのことは絶対に忘れません。

本当にありがとうございました。